

## I. 人は世界をどうとらえるのか? 認識論入門

## A. K \_\_\_\_\_ 論と G \_\_\_\_\_ 論

α. FB \_\_\_\_\_ = \_\_\_\_\_ (英)1561~1626

- a. 主著『ノウム＝オルガヌム』
- b. 知は力
- c. 真実を知るには I \_\_\_\_\_ を排するべき
- d. 実験・観察を繰り返し、経験を蓄積し、法則性を見出す  
= \_\_\_\_\_ 法 → EK \_\_\_\_\_ 論

β. D \_\_\_\_\_ (仏)1596~1650

- a. 主著『方法序説』
- b. 論理で真実に迫る = \_\_\_\_\_ 法 → TG \_\_\_\_\_ 論
- c. 一度すべてを疑ってみる (HTK \_\_\_\_\_)
- d. 「WYW \_\_\_\_\_」
- e. 一度は疑ったものももう一度認識されていく  
主観と客観  
SN \_\_\_\_\_ 「身」→空間的延長

## B. 2つの流派のその後

γ. G 論の論客 S \_\_\_\_\_ (蘭)1632~77

- a. 心と体はどちらも神の様態の一つ
- b. BH \_\_\_\_\_ 論
- c. H \_\_\_\_\_ 論、SS \_\_\_\_\_

δ. K 論から N \_\_\_\_\_ 論へ H \_\_\_\_\_ (英)1711~76

- a. 人間は因果性を認識できない  
創造、信念
- b. 人間の魂は「TA \_\_\_\_\_」

## C. カント哲学

ε. N 論の頂点 K \_\_\_\_\_ (独)1724~1804

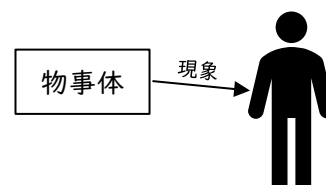
- a. 主著『純粋理性批判』(1781)
- b. 認識が対象に従うのではない。対象が認識に従う。

(CTT \_\_\_\_\_)

- ① \_\_\_\_\_ 感覚によって減少を受け止める

↓

- ② \_\_\_\_\_ 受け取った現象を統合し、判断する←このとき概念を使う



- c. 私は信仰に場所をあけておくために知識を制限しなかった  
 d. RR と JR の区別

## D. 認識論から観念論へ

ドイツ観念論 カントの継承者？

RR と JR の分裂を克服→精神

人間の内面と外界との相互性→JG \_\_\_\_\_

ζ. H \_\_\_\_\_ (独) 1770～1831 (フランス革命時代)

- a. 精神は自由を求める  
 b. 精神は集団にも宿る  
 c. 世界精神 / 絶対精神  
 d. 世界史とは絶対精神が自由を実現していく過程である。→B \_\_\_\_\_ 法  
弁証法

テーゼ → アンチテーゼ → ジンテーゼ ← 止場 Aufheben

e. 人間のコミュニティ = \_\_\_\_\_ (道徳+法)

第1段階 \_\_\_\_\_ 愛による結合。個人の自立はない

第2段階 \_\_\_\_\_ 自由・自立。欲望の体系、人倫

第3段階 \_\_\_\_\_ 人倫の最高段階。自由、安定を備える

η. ヘーゲルの左派の人 M \_\_\_\_\_ (独) 1818～83

- a. \_\_\_\_\_ ではなく \_\_\_\_\_  
 生産関係 上部構造と下部構造

b. 弁証法 + <sup>フョイエルバッハ</sup> \_\_\_\_\_ 論 = YS \_\_\_\_\_ (唯物弁証法)

## E. 実存主義へ

θ. 実存主義の祖 K \_\_\_\_\_ (デンマーク) 1813～83

- a. 今、現実に存在している自分  
 b. 「私にとっての真理であるような真理」

実存の三段階

\_\_\_\_\_ 的 → \_\_\_\_\_ 的 → \_\_\_\_\_ 的 ⇒ 「神の前の単独者」

ι. 存在を問う H \_\_\_\_\_ (独)1889～1976

a. 人間とは自分の存在を問うことができる生物だ

「ダーザイン Da sein」=現存在

b. しかし人間は日常にまぎれ、世間に合わせて生きてしまう

(被投性 世界的内在) (存在忘却 ダス・マン)

c. 「死」を思うことで、人は再び自分の生命を生きているという感覚を取り戻す(「死への先駆」)

↳他人と交換できない存在の境界

κ. Sa \_\_\_\_\_ (仏)1905～1980

a. MTJS \_\_\_\_\_ の代表

b. 人間においては「実存が本質に先立つ」

c. 人間は「自由の刑に処せられている」

d. 「人間は自らつくるところのものになる」

e. H \_\_\_\_\_ 論 = \_\_\_\_\_、アンガシュマン

F. 自分とは何か？

西洋思想の底流にある自己の理性への信頼

19世紀末～ それへの疑問

λ. 先駆者 S \_\_\_\_\_ (蘭)1632～77

a. 汎神論 神即自然

b. 「飛んでいる石は、自分で飛んでいると思っている」→JI \_\_\_\_\_ への疑問

c. 人間の行い、原因、そのさらに原因→JIはあまりない。むしろ必然

d. 必然を自覚的に生きる

μ. 言語学から Sa \_\_\_\_\_ (スイス)1857～1913

a. 言語学から歴史を追放した→言語の構造

b. 自然界の諸物にラベルをつけるように名をつけるのではない

c. 人間は言語で世界を区分けし、意味づける

「 \_\_\_\_\_ の \_\_\_\_\_ 」

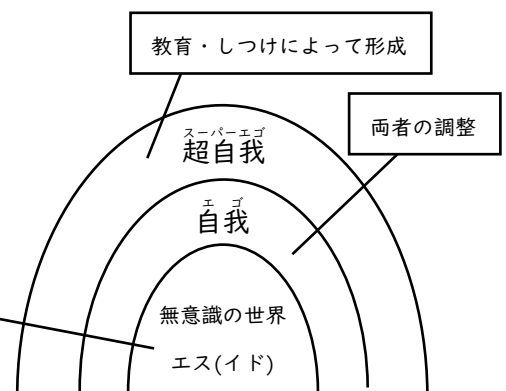
d. 一度形成された言語は人の世界観を規定する

ν. 精神医学の祖 F \_\_\_\_\_ (オーストリア)1856～1939

a. 三者のバランスが崩れる

→不安が生じる→自我防衛(抑圧、反動形成、投射、昇華)

動物的衝動( \_\_\_\_\_ )がある



ξ. フロイトの弟子 J \_\_\_\_\_ (スイス) 1875～1961

- a. フロイトが個人を対象としたのに対し、STM \_\_\_\_\_ に注目
- b. その中で出てくる一連の象徴的イメージ「元型」  
グレートマザー、オールドワイズマン、アニマ/アニムス
- c. リビドーの方向を基準に人間を外向/内向に分け、  
さらに4つの要素をかけて8タイプのパーソナリティに分類

ο. 文化人類学者 LS \_\_\_\_\_ = \_\_\_\_\_ (仏) 1908～2009

- a. 未開人の婚姻形態（特に交叉イトコ婚）の分析で名声を得て、構造主義人類学を打ち立てる  
一般交換 / 限定交換
- b. 人間の思考や行動は、無意識的かつ社会的に形成された「構造」に規定される
- c. その限りにおいて、未開社会が西洋文明より劣っているとは言えない

π. ポスト構造主義 Fo \_\_\_\_\_ (仏) 1926～84

- a. 構造主義の発想を使い、人間の理性を分析
- b. 人間社会の各時代の「知の枠組み（\_\_\_\_\_）」  
昔…類似  
17世紀～…比較…排除  
19世紀～…「人間」←認識の主体としての人間
- c. その後、Foは権力の分析に向かう
- d. 権力とは人間の中から働く（生権力、規格化）
- e. これらは人間の幸せという面もあるが、暴走するときもある
- f. 社会規範に従うだけでなく、自分独自の生を構築せよ！

G. アメリカの哲学 ～プラグマティズム～

ρ. P \_\_\_\_\_ (米) 1839～1914

- a. 自然科学の方法を哲学に導入
- b. 観念や意味は、\_\_\_\_\_ (プラグマ)に落とし込むことで検証される

σ. J \_\_\_\_\_ (米) 1842～1910

- a. 何が真理であるかは、それが各人の思考の中で有効であるかどうかによる

τ. D \_\_\_\_\_ (米) 1859～1952

- a. P \_\_\_\_\_ を実践の思想として発展させた
- b. 知性は真実の探求のみでなく、日常生活の問題や環境に適応するための道具である  
(DS \_\_\_\_\_、STT \_\_\_\_\_)
- c. \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_ → \_\_\_\_\_
- d. その点で、知識や理論は仮説であり、多様さや柔軟さが大切 ←民主主義

## H. フランクフルト学派 ファシズムと向き合った思想家たち

フランクフルト学派 “第一世代”

v. A \_\_\_\_\_ (独) 1903～1969

φ. H \_\_\_\_\_ (独) 1895～1973

- a. 1924 創設のフランクフルト大学 社会研究所に集った学者たち
- b. 「アウシュヴィッツのあと、詩を書くとは野蛮である」(A)
- c. 科学技術は人間の理性から生み出されたが、やがて理性がそれに従属し、  
目的の達成だけを考えるようになった

↓

そうした傾向は、自然界の支配だけでなく、  
人間を技術的に管理・操作できるという思想を生んだ (DTR \_\_\_\_\_)

↓

こうして生まれた、画一的な管理社会は F \_\_\_\_\_ を生んだ

↓

理性の道具化を押しとどめるには、物事への批判的な切り込みを大切にすることが鍵になる  
(HTR \_\_\_\_\_)

χ. はぐれフランクフルト学派 F \_\_\_\_\_ (独) 1900～1980

- a. 主著『自由からの逃走』
- b. 人類が追い求め実現した自由は、味わってみれば孤独なものだった

↓

これから逃げたくなかった人々は、権力者と一体化し、  
弱者を排撃するような心性を身につけていく (KSTP \_\_\_\_\_)

φ. フランクフルト学派第二世代 H \_\_\_\_\_ (独) 1929～

- a. 主著『コミュニケーション的行為の理論』
- b. 人間には DTR もあるが、CTR \_\_\_\_\_ もある  
対象を支配→システム      対話・合意 生活世界
- c. システムによる SS \_\_\_\_\_ の植民地化こそ現代の病理である
- d. 近代は挫折したのではなく、未完のプロジェクト  
対話による公共性の再建！

ω. HA \_\_\_\_\_ = \_\_\_\_\_ (独→米) 1906～75

- a. 主著『全体主義の起源』『人間の条件』
- b. 人間生活の三要素
 

{	_____	Labor	生存
	_____	Work	作品をのこす
	_____	Action	ことばで他者と交流し、公共空間をつくる
- c. 現代では Labor が肥大化し、Action がやせ細りがち  
→K \_\_\_\_\_ の喪失、K \_\_\_\_\_ への盲従